

# 人跡未踏の地を観光地に変えた男

## 永山 在兼なが やま あり かね

(出身地：日置市東市来町)



PROFILE  
加来 耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門誌誌を編集し、時代考証等も多岐にわたる。テレビドラマ秀才番組で監修・構成・出演などを幅広く手がけている。

果てしなく広がる樹海、仄かに立ちのぼる蒼煙、マリモの眠る湖沼を抱いて、阿寒は静かに響え立っていた。

大正七年（一九一八）、阿寒を管轄する釧路土木派出所の所長として、二十九歳の永山在兼が着任した。

当時、「陸の孤島」ともいうべき地元に暮らす人々は、常に飢餓に直面しながら、息をひそめるようにして生活していた。

もし、この惨状を救うとすれば、阿寒と弟子屈を連絡する、横断道路を敷設する以外に方法がなかった。

だが、巨大な熊の生息する、人跡未踏の荒野に、道路を通すことは技術上、資金的にも、不可能に近いことであったといっ

第一、この頃の日本はまだまだ貧しく、道路を通すには、通すにたるべき名分Ⅱ運ぶべき物資がなければならなかった。が、阿寒には格別の産業とてなく、弟子屈には鄙びた温泉郷がわずかにあるだけ。

どのように考えても、巨額な開削費用を、国や北海道庁が出してくれるとは思えなかった。

必死に知恵をしばつた永山は、ついに発想を転換する。

「売れる物がなければ、阿寒と釧路、それに摩周を一つにして、その風光明媚を売ればよか」

まだ、「観光」という言葉に馴染みのなかった時代に、鹿児島出身の、東京帝国大学工学部出のエリート官僚は、己れの構想に、それこそ生命を賭けた。

誰の目にも、何もせず無事、

任期を終えれば、中央での昇進出世が待っているように映った。

だが、永山は世俗の栄達名利よりも、今、苦しんでいる地元の人々を救うことこそ、自らの成すべきこと、男子の本懐だと感ずる人物であった。

「失敗すれば、死ねばよか。西郷南洲翁も、国のためなら死ぬ」といわれたではないか」

昭和三年（一九二八）、念願の道路工事はついにスタートしたが、想像を超える自然の驚異の前に、工事は日々、苦境の連続であった。

三年後、道路はついに完成したが、予算を大きく上回ったことから、永山の官僚生命は断たれてしまった。釧路を追われ、ついに郷里に戻った彼は、昭和二十年五月、ひっそりとこの世を去った。享年五十六。

しかし、阿寒は、昭和九年に第一次国立公園の指定を受け、その後、日本有数の観光地として、めざましい発展を遂げた。

「食えない村に、生活できる道を拓いてくれたのが、永山さんでした」

涙ながらに語った地元の人々は、建立したその顕彰碑に、今も花を絶やしていない。

